

Title	江波戸昭著 蚕糸業地域の経済地理学的研究
Sub Title	Akira Ebato, An economic geographical study on silk-reeling industry areas
Author	高山, 隆三
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1970
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.63, No.8/9 (1970. 9) ,p.713(97)- 715(99)
JaLC DOI	10.14991/001.19700901-0097
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19700901-0097">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19700901-0097</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の中で、他の意志を抑えて、以上の意志を高く立てるといふ意味で、人間存在そのものに関わる特定の価値理念に支えられて初めて効力を発揮する。個人の信仰の一層の内面化によって新しい生活意志を打ち立てた宗教改革者の教義中でも、カルヴァンのそれは、その最高のものであろう。但しルター派の教義も伝統主義へと傾斜しつつも、なお伝統を乗り越えさせる価値理念を有していたことは、ルター派の信徒たるアルフレートの事例からも明らかである。<sup>(22)</sup> さらに我々の問題としている時期になると、古典派経済学の利己心とこれに基づく生産的労働乃至は分業の称揚やリストのような生産力、とりわけ工業生産力の意義強調にみられる市民主義的勤労主義とでもいふべきものも大きな役割を果す。特に後者と関係して、先進国への国民的、国家的な意志形成、それに役立つ在来及び外来の思想といったものが後進国においては重要であったことを付け加えておこう。<sup>(23)</sup> かくして、一口に禁欲的職業倫理といっても、その裏にある価値理念や、それが活かされる経営環境との関係で、様々の型がうまれるのである。さきのヴェーバーの指摘は、カルヴァンの教義との関係で生成した改革派信徒の職業倫理を、彼独特の極限化方式で明らかにしたのであって、他の様々の型について十分の分析をしているわけではない。

さて以上のような視角からクルップ家、特にアルフレート・クルップの経営を分析すると、アルフレート自身が積極的に技術開発をし、さらに有能な職工長を中心とする技術者集団を作り出し、これを経営組織の

中軸にすえたことからして、その経営が技術的観念からする経営として極めて特異な優秀性を持っていたことが判る。それと共にアルフレート本人の対外的な積極販売活動と並び有能な代理商を把握して行った販路の獲得、すぐれた労働力確保の為の社会福祉的施策、最後に技術的観点と絡み合いつつ貫徹された家父長的な労働力管理という企業活動の側面では、近代性格と同時に前近代的な性格が色濃くみられる。<sup>(24)</sup> 最後にこの二重の相矛盾する組織活動を統合して行く組織者の経営遂行意志を支えたものとして、冒頭に掲げたアルフレートの禁欲的な職業倫理をあげることが出来る。これはクルップ家に受け継がれてきたルター派の信仰と、当時のドイツ、特にライン・ヴェストファーレン地方ですぐれた経営者の間に一般的風潮たるイギリス資本主義の技術的優位性に対する一種の国民的市民的対抗意識、そしてアルフレート自身の意志等が合成されてうまれたものといえよう。<sup>(25)</sup>

諸田氏の著作は、啓蒙的な年代記という形式をとったために、以上のような問題点の素材は提供しながらも、十分の解明を行っているとはいえない。この点、「経営史」の方法確立の必要性を感じた次第である。なお20世紀になってからのクルップ、特にヒトラー時代のクルップがアルフレートの家憲からはみだして、政治的世界へ立ち入るようになったことについては、経営内外の諸事情をふまえた展開が欲しい所である。(東洋経済新報社・世界企業シリーズ3巻・B6・317頁・650頁)

寺 尾 誠

う風に資本主義精神の発生(19世紀にエッセンに移住してからのクルップ家の歴史を想え)を表現すると共に、技術の発達の問題にふれ、生活態度の、実践的・合理的方法こそが自然科学を経済に役立てるべく実践的かつ方法的にとり入れることを可能にしたのだとしている。つまり禁欲的職業倫理は、労働の合理的組織化と共に技術の開発にも促進的な役割を果したというのである。

注(22) K. Marx, Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie in: Karl Marx, Friedrich Engels Werke, Berlin, 1960, S. 385 ff. ここにおけるルターの評価を、ヴェーバーのそれとつきあわせてみる必要がある。

(23) F. Zunkel, a. a. O., S. 66 f., W. Manchester, op. cit., p. 43. なお当地方の技術的先覚者ハルコルトのイギリスへの対抗心については W. Köllmann, a. a. O., SS. 56-121. を参照。大河内一男「スミスとリスト」243-360頁。

(24) 前記ハルコルトがヴェッター城に建設した蒸気機関製造工場においても、技術的先進性、労働者への啓蒙と共に家父長的な労働者管理の特徴がみられた。W. Köllmann, a. a. O., S. 65 ff.

(25) なお注(19)にも若干ふれたように、アルフレート乃至はクルップ家のルター主義の信仰には、エッセン南部ヴッパータルを中心として盛んであったカルヴィン(改革)派や敬虔主義の信者集団からの影響が考えうる。この点ヴェーバーは前掲の論文の中で、色々の宗派が混り合う地域においては他宗派からの影響に染まると指摘し、アメリカやオランダのルーテル派、アメリカのカトリック教会等をその例だとしているのは興味深い。

江波戸 昭 著

『蚕糸業地域の経済地理学的研究』

(1)

日本資本主義の形成・発展において、その不可欠の産業部門を構成した養蚕・製糸業の性格、発展条件に関する戦後の諸研究の中で、江波戸氏は製糸業の自主的発展地域である諏訪、組合製糸地域および養蚕業の「富農的展開」をみた群馬、蚕種製造において富農的発展をみた福島県信達地域の実態調査を通じて、開港を契機とする各地域の態様を、それ以前の経済構造との関係および製糸業の工業的発展にしたがっての各地域の対応を通じて「全機構的」に分析して、先駆的成果をあげられてきた。本書は江波戸氏の諸著作の集大成であり、幕末より昭和30年代前半にいたる地域経済構造の変動を実証的に追求した諸論文は、日本資本主義の養蚕・製糸業研究にとっては不可欠の研究であるといえよう。

本書の篇別構成は次の如くである。

序 蚕糸業地域の史的分析

I 諏訪製糸業地域

II 諏訪製糸業地域における産業資本の形成過程

III 諏訪養蚕業地域の変貌過程

IV 製糸組合地域

V 西毛養蚕業地域

VI 信達蚕種業地域

VII 最近の地域動向

すなわち著者の問題意識と分析視角を蚕糸業地域の実態調査を素材とし総括した序論に続いて6章からなる地域実態調査報告および養蚕業の戦後の地域動向を統計的に概括した終章よりなっている。先ず序に示されている著者の問題意識・分析視角を紹介しよう。

(2)

著者によれば蚕糸業を中心にした地域の経済構造の究明は「単にその地域内部における農民層の分解のあり方、農工分離の形態、地域的分業の形成過程を明確にするにとどまらず、従来の地主制——水田地帯偏重の日本資本主義発展に対する考え方を再検討する上にも、必須のことと考えられるのである。」(9頁)そこ

で再検討の視点は「養蚕に限らず、商業的農業畑作部門一般についていえることは、その低年貢→低小作料・低地価という相対的に有利な条件が企業的経営をより可能にし経営に際しての資本の有機的構成の高位性、あるいは国外市場をもつことからくる価格の有利性が、その富農的・資本主義的発展を比較的容易ならしめたということである。かかる発展的側面をもった畑作部門を無視して日本農業を論ずるのはきわめて危険なことにちがいない。あえていうなら、商業的農業畑作部門の分析が行われてこそ、日本資本主義と日本農業との対応関係をはっきり把握しうるのである。」(9~10頁)

かかる問題決定を前提として、「富農的経営をふくめた下からの蚕糸資本の発展に際して、いかなる性格の労働力がそれに対応して存在したかを検討することも、一つの課題」(10頁)としてとりあげるのである。

以上の課題にそって、続いて「製糸業発展の地域差」、「養蚕業における富農経営」の展開を総括する。諏訪における自生的な製糸資本の形成・展開に対し、群馬や福島における製糸業の工業としての面での停滞を「視点をかえると農業生産の加工部門として発展となり、富農的成長の一つの指標ともなる」(23頁)と把握する。実際に養蚕専業地帯一帯には「桑業の売買、借地農的土地借入をもふくむ経営耕地の拡大、経営に際しての農業賃労働依存度の大きさ」(24頁)などからみて富農経営がかなり存在し、その雇傭労働力数は産業資本形成期には「当時の実数をつかみうる資料が存在せぬため断定はできないが、都市産業資本に吸収されるよりさらに多くの労働力が、主幹労働力をもふくめて、当時展開しつつあった富農的経営に吸収されていた」(26頁)と推察している。そしてこの富農形成を大内力氏の日本資本主義の段階論的把握に依拠して、自由主義段階に照応するものとして把握し、「養蚕業におけるこのような富農的経営も、発展性をもちえたのはこの段階までであり、産業資本の独占化、農工間の跛行的発展が顕在化するにつれて、しだいに停滞・挫折していく」(26頁)ものと把握する。すなわち製糸資本の独占化の進行は養蚕農家の一加工部門としてそれまで経営していた蚕種製造を大製糸資本の手に剝奪し、群馬県西毛地域に強大な地盤を誇っていた「組合製糸」を、産業資本に強制転化し、また、大製糸資本に対抗する養蚕農家自身の出資による近代的「組合製糸」経営が形成される(30頁)。そして「日本資本主義が独占段階への道を歩みはじめるにつれて、日本農村は慢性的な不況

におちこみ」その結果、農業部門においても商業的農業を中心としてはぐくまれつつあった近代的経営への萌芽はむざんにみつとられ(31頁)養蚕農民も変質する。すなわち製糸資本の農村把握が積極的に進むにしたがい「養蚕農家はその加工部門として兼営してきた製糸・蚕種部門を放棄し、まさに養蚕専業農家として、特約制度の下、事実上の製糸資本の原料生産下請業的地位におしこめられてしまった。」(32頁)かくして富農的経営も完全に頭打ちとなり、生産力上昇による収量の増大はみられたにせよ、経営面積はもっぱら縮小の方向にむかい「中農標準化」という独占段階における「農民層分解の一形態」(33頁)をとる。養蚕労働者も第一次大戦期の第二次第三次産業の急激な発展にともなう賃労働需要の急増によって吸収されてゆくとともに労働賃金の高騰は、富農経営をして経営縮小・労働節約的・合理的経営へと向わせる大きな要因となり、さらに昭和恐慌、第二次大戦を経て、養蚕製糸業は衰退したのである。

## (3)

以上の序論に続いて2章以下を戦前の過程を中心に簡単に紹介すれば次の如くである。

「I 諏訪製糸業地域」では、明治年代における諏訪製糸業の日本製糸業における位置づけを概観した後、片倉製糸発祥の地諏訪郡川岸村の実態調査を通じて、先ず幕藩期における農家副業の進展、農民層分解を明らかにする。製糸業の勃興はその経済基盤の上に、初期の製糸家がほとんど村内の富農＝地主層であったところに、すなわち「商人による生産者支配というより、むしろ直接生産者としての農民の中から業者が分離していったところに」可能性があったものとした上で、諏訪製糸業における産業資本の確立・発展を、金融、労働市場の面にわたって分析している。「II 諏訪製糸業における産業資本の形成過程」はIを補足するもので三沢村(現岡谷市川岸地区三沢)の状況と個別製糸経営(林右衛門家)の内容を詳細な資料分析によって、旧川岸村では開港以前の農業生産力は低く、それを補うためにはじめられた副業の展開がこの地域に資本一賃労働関係を自生的に形成させていったことを明らかにする。そして「副業生産の発展を基礎とした農民層分解、農工分離の上に、下からの資本一賃労働関係が形成されていったことが、産業資本への発展をもたらしたのであって、同じ製糸業でも福島や群馬のそれとの間に周知のごとき発展上の差異を生じたことの原因

を」何よりも著者は副業の展開に求めるのである。「III 諏訪養蚕業地域の変貌過程」では農業と工業の分離—社会的分業の成立がいかに地域に反映されていたかを諏訪郡内において検討するものとして、諏訪郡湖東村をとりあげ、そこにおける原料供給のための養蚕専業地域としての発展を通じて、生産力の低い新田村における養蚕業の急速な普及、富農的養蚕経営の形成を明らかにし、そのような発展が大製糸資本の地元でありながら早くから製糸家の買い叩きに対抗するための自己防衛態勢をととのえさせ、「特約組織」を進展させなかった原因となったことを明示する。

「IV 組合製糸地域——碓氷社を中心に——」では群馬県碓氷郡旧原市町を中心とする調査に磯部町の資料を加え、この地方の蚕糸業は開港後ことに明治期にはいって飛躍的に生産力を上昇させていったことを明らかにする。そして組合製糸形成要因を「明治初年の平均所有耕地約1町という比較的大きな経営規模をもつ低位生産性の西上州畑作地帯においては農民層分解はおくれ、養蚕＝製糸未分離のまま分業は進まず、豪農層の主導の下に商品生産拡大の方向が生産過程への投資により工業面へ向かうことなく、共同販売設立による流通面＝出荷組織の充実により養蚕＝製糸農民としての拡大発展の方向をとった」(239頁)ということに求める。さらにこの地域の「製糸工程は養蚕農家の加工部門として農業に結合した形で、その経済的発展の一手段として存在したのであった。」(239頁)さらに組合製糸とその組合員が信州の製糸産業資本の進出の前に、原料供給者および営業製糸的性格をもつにいたる過程と養蚕富農経営の大正から昭和初期にかけての展開を明らかにする。「V 西毛養蚕業地域——養蚕改良高山社を中心に——」では群馬県多野郡旧美九里村における日本最初の養蚕学校高山社の発生地高山部落を中心とした調査によって、高山社に先導され明治中期に養蚕大経営が営まれるようになり、養蚕賃労働においても部落単位で「労働組合」と名づけられる組織が明治30年代に結成される状態にあったことを明らかにする。養蚕農家における資本主義的経営の萌芽がこの地帯でも立枯れてゆくのは明治末年からで「先行した産業資本がその強大な力をもって後からくるものの発展を阻害し、自らの利潤追求の一要素としてこれらをその支配下にくみこみ、利用していったからにほかならない。」(301頁)と論じている。「VI 信達蚕種業地域」では江戸時代から本場蚕種の名を与えられ全国一の蚕種製造地の一部をなしていた福島県伊達郡伏黒村

が、開港後蚕種生産を一層拡大させ、農民層の富裕化をもたらすが、明治末期から外来製糸資本の進出によって蚕種・製糸工程が養蚕農民から剝奪され始め、昭和恐慌時の繭価低落を契機とする特約制度の急速な進展は村内蚕種業者を駆逐してしまったことが論じられている。

## (4)

以上、戦前過程を中心としてその内容を概説したのであるが、ここで基本的に問題となる点について考えてみたい。「序 蚕糸業の史的分析」で著者が述べていたように本書の課題は、商業的農業畑作部門の分析による日本資本主義の再検討であった。そして著者は「日本資本主義の形成・確立期においては、都市産業の発展と同時に、一部農村においても商業的農業畑作部門を中心に富農的・資本主義的経営が展開する可能性をもちえた」(26頁)として、養蚕・蚕種専業地域における富農的・資本主義的発展についての説得ある実証はなお果されていないものといえる。すなわち、著者は労働力の形式的包摂の側面のみ着目して富農経営展開の可能性を論じているが、養蚕富農経営が小生産経営に対し農業生産力上の優位を決定づける技術的条件があったか否かの解明は果されていないのである。事実上、農業生産力上の優位を決定する技術的基礎は形成されていなかったのであり、従って、養蚕小生産者との競争上、価格面でも販売上でも有利な地位を確保していたものとは考えられないのである。富農的・資本主義的経営の生産力的基礎を欠除した「富農的経営」であるとするならば、養蚕業における小農的労働集約的技術の発展によって、その解体は必然的であったといえよう。それ故著者が富農的発展の可能性、客観的条件を日本資本主義における自由主義段階に求め、富農的発展の頭うち、立枯れを日本資本主義の独占段階への移行、製糸資本の独占化に求めようとする把握は、生産力構造視点の欠除を示しているものというようである。

さらに、上述の如く富農的発展の頭うちを製糸資本の独占化、すなわち製糸資本が蚕種を製造配布し、特約組合を通じての養蚕農民の把握・支配と同時に、第一次大戦期以降の急激な第二次・三次産業の発展による

養蚕雇傭労働力の吸収と賃銀高騰に求めているが、これは、養蚕専業地域のIII、組合製糸地域のIV、西毛養蚕業地域のVの各章で具体的に実証されているとは云い難いのである。すなわち、III、IVでは富農的経営は昭和初頭まで続き、Vでは明治末にそれが挫折するとされるのであるが、そこで問題となる点は製糸資本の独占化の意味が明らかにされていないことであり、少なくとも大製糸資本の糸・繭価形成における役割、糸・繭市場支配の実態が明示されるべきであって、さらに今後究明されなければならないものと思われるのである。

製糸資本の独占化と関連をもつ問題は、明治末より伊那を中心として結成される「製糸組合」の性格についてである。著者は製糸組合を「大製糸資本による繭の買い叩き、特約組合設置に対抗する目的をもち」(30頁)「独占段階における小生産的協同組合として、小生産経営を持続せしめる役割を果たした」(31頁)と規定されるが、組合製糸、養蚕組合の結成は、著者も述べている如く「明治末から大正期になると、海外市場の不安定から糸価が変動し、それについで繭商による繭の買い叩きがひどくなってきた。」(197頁)のことであり、これはむしろ、製糸資本の前期的性格、商業資本的収奪に対抗するものとして形成されてきたものとみられるのである。前期的な収奪に対する小商品生産者としての生産物価値実現としての運動としてとらえられるとするならば、さらに明治期における繭商品価値＝価格をいかに把握するかが問われなければならないであろう。著者は養蚕農民を小商品生産者として明治初期から把握し、「価値法則」が貫徹しているものとしてそのうえで「養蚕富農経営」の存在を確定することを暗々裡に前提されているのであるが、繭生産者が小商品生産者として何時確立されたかが問題とされるべき点であると考えられるのである。

以上の疑問は著者の意図された点からはずれているのではないかという恐れももつものであるが、本書の各地域にわたる実証的研究は高く評価されるべきものと考えられるものであり、著者の御教示が得られればまことに幸いと思う次第である。

(古今書院・1969年4月刊・B5・388頁・2,500円)

高山隆三